

## 令和5年度第2回大府市ひきこもり支援地域協議会議事録（要約）

日時 令和5年10月13日（金）午後3時30分から午後5時まで

会場 大府市役所 全員協議会室

出席者 （協議会委員）※敬称略

会長 山田武司、副会長 來多泰明、外波祐二、吉田浩子、近藤美智雄  
杉原直樹、竹内美喜、時安利栄、野口桂子、池田久絵

欠席者 神谷恵美子、井戸千尋（代理出席者 山田浩美）

（事務局）※所属順

福祉部長 猪飼、福祉総合相談室長 小清水、福祉総合相談室主査 山下、福祉  
総合相談室主事 伊藤、子ども未来課子ども支援係長 西川、健康増進課長

原田、学校教育課 指導主事 伊賀、学校教育課スクールソーシャルワーカー  
山田、教育支援センター代表 蟹江

（傍聴者）2名

<司会：事務局>

### 1 会長あいさつ

第1回大府市ひきこもり支援地域協議会の振り返り、壮年期を見据えた社会参加の課題について、地域とのかかわり地域資源の活用について、意見を伺いたい。ひきこもり支援に関しては、色々な入口があることが良い。様々な段階の人への色々な支援、柔軟な支援のルートを作っていけると良い。

### 2 議題

<進行：会長>

（1）第1回大府市ひきこもり支援地域協議会の振り返り（資料No.1）

（事務局から資料に沿って説明）

【意見、質疑応答】なし

（2）壮年期を見据えた社会参加の課題について（資料No.2）

（事務局から資料に沿って説明）

【意見、質疑応答】

委員）

・ひきこもりの10代等に多い「家庭問題」は具体的に何か。

事務局）

・把握していない。

委員）

- ・資料2にある内容について質問、エスコートおおぶへの具体的な求めとはなにか。

事務局)

- ・本人からの意見を把握していない。
- ・エスコートおおぶは、ひきこもりの人の一時的な居場所として活用されている。ライフステージの中で一時的な居場所という位置づけであり、当事者のニーズに応じた、エスコートの次の段階を考えていかなければならない。
- ・エスコートおおぶという建物を居場所と考えがちだが、地域にある様々な機会、例えば地域での清掃活動等のボランティアに参加できるようになることは、居場所と考えても良いのか。

委員)

- ・知多では居場所で何かをさせるように考えるのではなく、自由に過ごせるフリースペースを作っている。料理を手伝うスペースを作る等きっかけを見付ける場になっても良いのではないか。楽しいと言って参加してくれることが、活動者としては大変嬉しい。
- ・管内いくつかの支援団体がある。就労はハードルが高いため、色々なメニューの1つとしてボランティアがあると良いと考える。
- ・ボランティア活動も1つのメニューとして、強制にならないように繋ぐことも可能である。安心できる形で繋いでいくことが大事である。
- ・アウトリーチは難しく、追い返される可能性も高い。本人のやりたいことを紹介していくことで成功率が高まることを知多市の研修会で知った。
- ・壮年期を見据えた社会参加について協議していきたい。
- ・10代20代、高校を中退した世代のひきこもりの予防的な働きかけとして、学習面のサポートを紹介できなかった経験がある。再度学校に戻れるような支援を入れた方が良いのではないか。
- ・途切れない支援は何より大切である。早期に支援することが長期化予防になると考える。学習支援に関して、エスコートとしても考えてみたが、実現に至らず難しさを感じる。20歳を超えた子どもたちが学び直しをする機会はない。溶け込めないし、続かない。大学受験を目指す子どもがエスコートに来ても、教えられない難しさを感じている。
- ・高校レベルの学習を教える機関が無い、大学生や教員の力を借りるしか方法がない。
- ・エスコートおおぶでは大学生の力を借りているか。
- ・至学館大学人間力開発センターと話をしているが、高校レベルの学習を教えるのは大学生でも難しい。
- ・名古屋大学の学生などは、ボランティアではなくアルバイトをしている。
- ・学び直しを希望する人を対象に高校卒業認定を目指す学びの場を提供している。現役の大学生がアルバイトで対応している。小学生レベルの内容のこともあるので、必要であれば一度見学をしてみてはどうか。
- ・就労を目指さなくても良いか。

- ・高校卒業認定を目指す居場所、何かを勉強したいと思う人の居場所として運営している。
- ・名古屋市では貧困家庭を対象にして学習支援を行っている。大学生がアルバイトとして参加できるよう、市が予算化して事業として対応している。
- ・学習支援（高校に戻る、高卒認定をとる）について市でも検討してみてもどうか。
- ・上手くいっていること、不足していることなど提案は無いかな。
- ・障がい者相談支援センターで関わる中で、専門相談から引継ぎ、障がい福祉サービス利用（就労の通所サービス）に繋がったケースがある。対象者は絞られるが、事業所から「来られる日に来たら良い」という受入れをしてもらった経緯がある。
- ・一番の問題は病院に通っていないために、就労継続支援で受け入れられないことである。
- ・地域活動支援センターではどうか。
- ・地域活動支援センターとエスコートおおぶは、併設しているので、地域活動支援センターはどんな人でも参加可能である。福祉サービスを利用することで、外に出ることへの実現に繋がったことがある。手段としての通院勧奨をしている（生活訓練として、一歩家を出ることを目指す）。見学に来て説明を聞いただけで理解できる人には手段として案内する。ある事例では、半年以上自宅に仕事を持って行き、少ない報酬を得て体験したことで、外出への意欲やアルバイトへの意欲に繋がり、地域活動支援センターを利用するための必要な手段として通院勧奨し成功したこともある。
- ・40代以上への支援はどのようなものがあるか。
- ・ひきこもり歴20年から30年になり家族支援として保護者と面談を続けるが、途中で終了するケースがある。中には子どもが医療にかかり福祉サービスに繋がったケースもあるが、繋がりが途絶えてしまうケースもある。高齢者虐待のように市が介入する関わり方もあるが、本人に関われないケースも多い。アウトリーチをすれば関われるという問題でもない。保護者が社会から孤立しないように保護者を支援するふぁみり〜Caféの取組は支援のひとつである。
- ・ひきこもり経験者が訪問したり話をしたりすることが有効なのではないか。居場所に経験者がスタッフとして存在することも有効だと考える。
- ・居場所を卒業する子も支援に携わっても良いのではないかな。
- ・長くひきこもっている人では、会えない人が大多数。親と繋がり続けること、変化しないことを報告するだけでも良いことを伝えている。市主催のアウトリーチは本人承諾の元行うが、承諾しない人への取組については今後の課題である。
- ・アンケート回答「分からない」が、本人にも家族にも多いことが特徴的だと思う。何をしてもよいか分からない状況の親子である。分からない中でどのような一歩を進めていくかを試行錯誤することが大切である。好きなものが固まっていて、拠り所になっている人がいる。他のことに関心を持ってもらう方法を模索していかなければいけない。
- ・親と繋がり続ければ、子どもの変化に繋がる。
- ・経験した人は分かると思うが、後退するとこのまま一生続くのかと不安になる。特効薬が

欲しいと考えてしまう。

- ・短期での回復は無いので、保護者をどのようにサポートするかが大切である。
- ・愛知県の委託事業で、経験者等ピアサポーターを派遣することができる。

(3) 地域との関り、地域資源の活用法について (資料No.3)

(事務局から資料に沿って説明)

【意見、質疑応答】

委員)

- ・途切れない支援 (中学校から高校への繋ぎ、高校を中退する段階での繋ぎ等) の事例や、就労継続支援事業を行っていて、就職活動をしたと言われた際の対応などを発表してほしい。

事務局)

- ・ひきこもりの人の趣味を教える側で活かすことは、支援ではないか。

委員)

- ・地域の活動に参加することは有効だが、事前の個別の準備は大変だろうと想像する。
- ・「助かる」等と言われると、長続きする。
- ・ハローワークにはひきこもりの人が自ら来ることは無い。市の相談窓口を経由することが多い。同行してくれる支援者を交えながら、まずは1日でも良いので等と事業所開拓している。定着に向けての支援の必要性も感じた。
- ・地域資源として、居場所や受入れ企業、ボランティア団体のマップがあると良い。ひきこもりの人にとってハードルが下がるような企業案内等があると分かりやすいのではないか。

### 3 事務連絡

事務局)

- ・第3回大府市ひきこもり支援地域協議会は、令和6年2月5日(月)午後1時30分から、大府市役所 全員協議会室で開催予定。